

A. Norman Jeffares :
*A COMMENTARY
 ON THE COLLECTED
 POEMS OF W.
 B. YEATS*

A. Norman Jeffares and
 A. S. Knowland :
*A COMMENTARY
 ON THE COLLECTED
 PLAYS OF W.
 B. YEATS*

増谷外世嗣

ここに二冊の著書を一對にして書評の対象としてとりあげたのは、それらがイエイツの作品の世界を照明するのに互いに補完し合う姉妹篇として構成されているからである。

前者が出版されたとき、イエイツ愛好家達は実に長い間待望されてはいたが果たされがたかった種類の構想の中のみあった成果がようやく実現されたような喜びと称讃の声をあげた。そして、それは単に丹精された集大成への敬意というよりは読者をしてその構築の基底に働く或る原理への目醒めをさそうようなものであった。

およそ半世紀以上にわたるイエイツ批評史をふりかえってみたとき、この評釈集のもつ意義は幾重にも深い。イエイツ研究が批評界の関心を深く呼び始めたのは第二次大戦後数年たってからのことである。このこと自身が或る象徴的な意味をもっている。それまでもイエイツの作品への関心はかなりのものではあったが、イエイツの作品界の中心に迫る射

程範囲に入っている批評眼そのものを欠いていたといえる面があったのである。そのような批評眼を目醒めさせた端緒ともなった一つの研究がジェファーズの『イエイツ、人と詩人』(1945)である。この評伝的批評を知る人にとっては彼が如何に詳しく資料を探索し、かつ、如何に巧みにそれらを精選、駆使して人間と作品が織りなす詩人の世界を構築して行く批評家であるかは周知のことである。資料をして語らせつつ、けっしてその目的を忘れないこのジェファーズの姿勢がここにみごとに結実した感をおぼえざるをえない。こういった一般的批評態度としての問題と共に、さらに今一つ、イエイツの作品群に接近し、その中心に迫ろうとする過程の中で或る注意を捉されてくることがある。現代英詩人の中でエリオットとオーデンを象徴的に左右の両極に立つ異質の詩人だとみなす場合、そこにイエイツを持ち出してみると、この両詩人の異質性は同質の世界の中の左右両極であることに気づかされる。つまり、反応の仕方こそ違え、根本的には彼らを培ったものは同質のイギリス文化とヨーロッパ文化の重層であることに気づかされる。イエイツのになった文化的、政治的コンテキストは明らかに両詩人のそれらとは違ったアイルランド的伝統の世界であり、それが詩作品の中に主軸となって展開されてくる。アイルランド民話伝説に依拠する神々や英雄の登場もさることながら、それらが織りなす象徴的構造が独自のコスモロジーを形成しているのである。そこに幾多の面からの注釈が渴望されてくる。『詩集』に附せられたイエイツの自注や Vaviorum Edition に附された注釈では理解の程度は極めて限られてくる。おのずから数多くのイエイツ研究書が多分に注釈的役割を果たさねばならない部分が多かった。イエイツの散文作品や書簡、或いは古代アイルランドから現代アイルランドに至るまでの反英抗争史などか

らの援用をまってイエイツのコスモロジーは多角的に研究されてきた。したがって、個別的な意味をもつ研究書や批評書の中に、それぞれの特色をもつ根拠ある評釈や註釈が散逸している状態にある。こういったことは数多い作品を生んだ作家の研究について多少とも言えることではあるが、イエイツの場合は、イギリス的ならざるアイルランド、或いはローマやモスコに象徴されるヨーロッパ的伝統とされているものに未だ染まっていない、或る起源的な世界を辿ろうとする者のケルンの探索である。この道程の織りなす道筋を出来る限り客観的にときほくしてゆくような評釈、註釈が一つにまとめられたならばという待望——これが最初に言った人々の待望だったのである。

イエイツの詩作品と劇作品は共にイエイツの世界では一体となっているものであるが、劇作品は詩作品とは一線違って、全体に共通した一つの舞台が用意されている。イエイツ自らに言わせれば、日本の能の話からヒントを得た高雅で簡素な一種独特の劇としての構造原理がそなわっている。しかも、謎を秘めたアイルランドの古くからの民話伝説が象徴的に内包され、それらが、詩人の想像力の中で、薄暮の中の影のように演じられる象徴劇の中に織りなされている。詩作品よりは劇作品を読みとろうとする方が遙かに配慮と勇気を要求される。それはしばしば、私には挫折させられるほどのものであったが、このコメントは、その挫折感を払いのける勇気を鼓吹してくれる。

この両者の構成は同じ方法によっている。すべての作品ごとに、その生誕から幾度かの改作をへた過程にそって、それらの動機、意図から、作中に含まれる謎や象徴についての、まずイエイツ自身の散文、書簡、註釈の中から関係する註釈が網羅され、さらに、必要な

簡処には原作との種々な因縁関係をもつ民謡や古典作品の部分の引用を伴いつつ、現在までの多くのイエイツ批評書の中の主要な意味をもつもの、たとえば、古くはレイディ・グレゴリーから新しくは R・エルマンや T・R・ヘンなどの解釈、批評をも充分に取り入れられて、それらが有機的にかみあい作動している。必要なものが出来る限り収集、精選され、そこに配置、構築された評釈の織りなす模様はみごとに演出された評釈の祭典のようである。表面にこそあらわではないが、基底に働く構築原理に思いあたったとき、改めて、このような批評活動が放つ清浄な芸術性に目醒めさせられるものである。

次に引用するイエイツの或る散文作品の箇所が何という詩作品についての評釈になっているか、心当たりのない人はこの評釈書の中の作品、'The Statues' の部分をひもといてみられるとよい。

There are moments when I am certain that art must once again accept those Greek proportions which carry into plastic art the Pythagorean numbers, those faces which are divine because all there is empty and measured Europe was not born when Greek galleys defeated the Persian hordes at Salamis; but when the Doric studios sent out those broad-backed marble statues against the multiform, vague, expressive Asiatic sea, they gave to the sexual instinct of Europe its goal, its fixed type

A. Norman Jeffares: *A COMMENTARY ON THE COLLECTED POEMS OF W. B. YEATS* 1968. London, Macmillan.

A Norman Jeffares and A. S. Knowland: *A COMMENTARY ON THE COLLECTED PLAYS OF W. B. YEATS* 1975 Stanford University Press.